ラ・ブリュイエールとその時代

吉川　浩

フランスにおける文芸の古典主義の盛衰は、政治の絶対主義の消長とほぼ並行する。文学の十七世紀も、政治の十七世紀と同じく、一五九八年に始り、一七一五年に終る。ナントの勅令発布からルイ十四世の死に至る期間である。

この時代は、さらに四期に区分することができる。

第一期（準備期）。一五九八年――一六二四年。ナントの勅令によって宗教戦争はようやく終熄したものの、アンリ四世の暗殺、摂政マリ・ド・メディシスとルイ十四世の対立など、まだ政治的混乱が続く時期。この間、風俗や文芸においては、十六世紀的粗野と豊饒が次第に整理され、思想、感情、表現の改革が進み、十七世紀的洗練と秩序が準備されていった。古典主義と絶対主義の胎動期、マレルブの時代である。

第二期（形成期）。一六二四年――六一年。宰相リシュリューのもと、強力な中央集権化政策が推進され、封建貴族が最後に試みたフロンドの乱も王権の勝利のうちに終結し、リシュリューからマザランへ、ルイ十三世から十四世へ王権拡張政策が順調に受けつがれ、絶対主義体制が確立に向う時期である。思想や文芸の上でも論争が盛んに行な

われ、厳密な古典主義の教義と法則が定められていった。デカルトとコルネイユの時代である。

第三期（最盛期）。一六六一年――八〇年。太陽王ルイ十四世親政のもと絶対王政が隆盛の極に達した時期、内に絶対主義的社会秩序が最も安定し、外にフランスの国家的勢威が最も発揚された時期である。文芸においても、国家的統制、社会的秩序を反映して、格調正しい古典主義が確立した。厳格な形式への服従が要求され、文体の簡潔、明快が尊重された。理性が常に玉座に君臨し、良識、規律、節度、中庸が支配した。《美しい均斉の時代》、いわゆる一六六〇年代の作家たち、ラシーヌ、モリエール、ラ・フォンテーヌ、ボシュエ、ボワロ、パスカル、ラ・ロシュフコーなどの時代である。

第四期（批判期）。一六八〇年――一七一五年。ルイ十四世治世末期にあたり、度重なる対外戦争や壮麗なヴェルサイユ宮殿造営のため、国家財政が窮乏し、過酷な徴税に苦しむ農民の一揆が続発して社会不安が増大した時期である。デカルトの影響を受けた合理的批判精神が権威に対して批判を開始する時期、静から動へ、安定から変化へ時代が移行し、作家の良心がうずき、新しい視野が開け始める転換期である。

ラ・ブリュイエール（一六四五――九六）は、フェヌロンとともにこの第四期を代表する作家である。彼は文芸理念の上では古典主義に忠実であったが、主著『レ・カラクテール』（一六八八年初版）に選んだ題材は全く画期的であった。彼はそこに《当代》を描いたのである。六〇年代の作家は決して自らの生きている時代や場所を対象とはしなかった。ラシーヌやラ・ロシュフコーの主題は、あくまで時間や空間を超越した《永遠の人間》であり、《人間一般》であった。古典主義時代には、時とともにうつろいゆくもの、所が変れば通じないものは厳しく退けられ、常に《永遠》と《普遍》が尊重されたのである。ラ・ブリュイエールも、彼らと同じく、永遠の人間像の造型、普遍的人

間性の追求を目標としはしたが、その素材には敢て十七世紀末フランスの最も特徴的な人物、徴税請負人や宮廷人などを選んだ。

彼は、もはや六〇年代作家のように、不動の時代に安住し安定した秩序に支えられて、ひたすら永遠と普遍を思索してはおれなかった。八〇年代になると時代は動き、絶対主義体制の社会的矛盾が増大していたこともさることながら、彼は当時としては珍しい体制外の作家だったのである。ボシュエやモリエール、ラシーヌなど宮廷づき作家と違い、ラ・ブリュイエールは生涯、王の年金や直接の庇護を受けなかった。彼は六〇年代作家よりはるかに自由な体制批判のフリー・ハンドを持っていた。しかも、下層ブルジョワジーの出で、大貴族の教育係となり、宮廷や大貴族の生活を垣間見た彼には、当時の社会体判に対する憤懣、時代に対する怒りが渦まいていた。彼は誰よりも広く社会を見、誰よりも鋭く体制のゆがみを体験する位置にいたのである。

こうして『レ・カラクテール』には、下は農民から上は宮廷人に至るまで、当時の社会各階層にわたる幅広い人間群像が登場し、各階層の典型的人物の描写を通じて、彼らの背負う社会のゆがみ、時代の悪に対してかってない厳しい批判が加えられることとなった。そこにはルイ十四世の《大御世（グラン・シエークル）》のあらゆる栄光と悲惨が投影され、いかなる歴史書より鮮かに絶対主義体制下の社会の有り様（よう）を伝えている。今日、この時代を語る歴史書で、ラ・ブリュイエールの『レ・カラクテール』を引用しない本はない。それは最もすぐれた社会のパノラマであり、時代の証言である。

小論においては、ラ・ブリュイエールの生涯をたどり、『レ・カラクテール』を読みながら、ラ・ブリュイエールとその時代のかかわりについて考え、あわせて十七世紀末とはいかなる時代であったか、ルイ十四世の絶対主義はいかなる社会を残したか、を明らかにしたいと思う。

生　涯

ジャン・ド・ラ・ブリュイエールは一六四五年、パリの中心、セーヌ川に囲まれたシテに生れた。ノートル・ダム寺院のすぐそばのサン・クリストフ教会に残る記録によると、その年の八月十七日に洗礼を受けている。おそらくその前日に生れたのであろう。諷刺の名人、モリエールやボワローと同じく、彼も生粋のパリっ子である。

父ルイはパリ市役所の年金監査官という平凡な役人、母エリザベト・アモナンはパリ市内シャトレにある裁判所の代訴人の娘であった。何の変哲もない市民階級の出である。家系をたどれば、百年前、高祖父はパリで手広く薬種屋を営み、曽祖父は商いのかたわら司法官としても活躍した。宗教戦争当時、この曽祖父はカトリック同盟（Ligue）の有力な一員として政治運動に参加し、アンリ四世が自ら新教に改宗して新教徒勢力と妥協をはかり、一五九四年パリに入ると、これを潔しとせずベルギーに移住した。その子（ジャンの祖父）はパリに戻ったが、かつての富と社会的地位を回復することはできなかった。ラ・ブリュイエールの反骨精神と諷刺精神は祖先伝来のものであったかも知れない。

ルイとエリザベトの間にはジャンを長子として八人の子供が生れた。一家はルイの俸給とエリザベトの持参金一万二千リーヴルの利子とでつつましく暮していたが、この家には父方の独身の叔父が同居し、家計を援助していた。皮肉なことに彼は、後年ラ・ブリュイエールが激しく攻撃した徴税請負人、金融業者の一人であった。

ラ・ブリュイエールの幼少時代を知るに足る記録はほとんどないが、一家はこの頭の良い少年に大いに期待していたらしく、オラトワール派の学校で教育を受けさせた。この学校は、主として聖職者、説教家を養成する所で、修辞学の授業に多くの時間を当てていたが、当時多くの子弟が学んだジェズイット派の学校より自由で近代的な人文主義

数育を行なっていた。ジェズイット派の学校ではラテン語の教育が中心であったが、オラトワール派の学校ではギリシャ語教育が盛んであった。ラ・ブリュイエールはここでツキジデスを読み、歴史に親しみ、ソクラテス学派の思想に共鳴した。後年、テオフラストスの翻訳をするほどギリシャ語に堪能になったのはこの学校のお蔭である。他に、ラテン語、イタリヤ語、当時としては珍しくドイツ語まで学んでいる。

だが、ジャンはやがて一家の希望に従い、聖職者への道は進まず、法律の勉強に転じた。一六六五年、二十歳でオルレアンの大学に民法の論文を提出し合格している。当時パリ大学には教会法の講座だけしかなく、民法の論文はオルレアンかポアチエか、いずれかの大学に提出しなければならなかった。

その年パリに帰り高等法院の弁護士になった。七三年まで八年間この地位にあったが、この間いかなる弁護活動を行なったか、記録は全くない。恐らく凡庸な弁護士だったのであろう。

六六年に父を失った。その後、一家は叔父のとりしきるところとなったったが、彼も七一年に死んだ。この叔父は世渡りがうまく、時流に乗って徴税請負、金融の仕事で相当の財を成していたが、甥にも遺産の一部を残してくれた。お蔭で、ラ・ブリュイエールは一六七三年、一万八千リーヴルを投じてカン収税管区収税官の肩書きを買うことができた。

当時は、いわゆる売官制のもと、多くの官職が金で売買されていた。国庫収入をふやすため、国がさまざまの官職を設け、これを売っていたのである。仕事はほとんどなく、肩書きだけという官職も多かったが、他人に転売することができたし、年金もついていたから、土地や債券を買うのと同じであった。官職を買うということは、社会的身分を獲得するだけでなく、経済投資でもあったのである。

ラ・ブリュイエールが買った官職も、こうした閑職の一つであった。一六七四年九月、一度だけカンに赴き、就任

式をすませたあとは二度と任地に行かず、パリで暮していた。年金は二千三百五〇リーヴルであった。

ラ・ブリュイエールには弁護士という仕事は不向きであったようだ。『レ・カラクテール』にも、人間の欲と欲があい打つ訴訟というもののおぞましさ、かけひきのともなううす暗い法廷への嫌悪が迷べられている(Ⅶ21)(Ⅸ72)。裁判という苛烈な争いにまき込まれる職業より、気ままな読書と思索に耽れる「賢者の無為」(Ⅱ12)を彼は望んだのである。一六八六年までこの職を手放さなかった。

この頃、ラ・ブリュイエールは煩わしいものは何も持たず、独身のままで母や弟妹と同居し、もっぱら読書と思索に親しんだ。疲れればリュクサンブールやチュイルリの公園に出、道行く人々や町の風物を眺めて過ごす、悠々自適の生活が続いていたらしい。裁判所時代の友人の書き残したところによると、ラ・ブリュイエールは天に近い部屋(＝屋根裏)に住み、そこをうすいつづれ織りの壁かけで仕切っていた。ドアをあけると、風で壁かけがゆれ動いて彼の姿がのぞき、さあ思索の精髄をおすそ分けしましょうかという様子で、いつもにこやかに迎えてくれたという。※おそらくこの頃、テオフラストスの翻訳と彼自身の『レ・カラクテール』の執筆が始ったものと推定される。

※ Vigneul-Marville《Mélanges d'histoire et de littérature》

一六八四年八月、四〇歳のとき、コンデ家の教育係に任ぜられた。宮廷づきの説教家でルイ十四世の王太子の教育係であったボシュエの推薦による。ラ・ブリュイエールが、いつどこでボシュエの知遇を得たかは明らかでないが、当時ボシュエの周辺には学者文人が群れ集い、神学論、文学論を語り合うサークルが出来上っていたから、いつの頃からかラ・ブリュイエールもこれに加わり、学識と人柄を見込まれるに至ったのであろう。

コンデ家はブルボン王家の分れで、当主の大コンデ公(一六二一――八六)はロクロワの戦いを始め、フランドル

戦争、オランダ戦争などに数々の武勲をたてた、十七世紀最大の武将である。晩年はパリの郊外シャンティに隠栖し、モリエール、ラシーヌ、ボワローなど文人と交わっていた。

これ以後、ラ・ブリュイエールは、当時十六歳のその孫ブルボン公の教育係として、パリやシャンティのコンデ家の邸宅に住むことになった。これは一介の市井の文人にとって思いがけない出世ではあったが、思ったほど居心地の良い地位ではなかった。彼は初めブルボン公の教育の全てを任されると期待していたが、そうではなかった。※ジェズイットの僧など、数名の教育係との分担であった。彼はラテン語、哲学、フランスの制度、地理、近代史を担当した。

※ Lettre à Condé du 9 février 1685

この大貴族の家には、気持の良い人物は一人としていなかった。大コンデ公だけは、ラ・ブリュイエールの学識を尊重してくれたものの、すでに傲慢で頑固な老人となっていた。その子アンギャン公は、サン・シモンの伝えるところによれば、「吝嗇で、嫉妬深く、怒りやすく、教養のない人物で、召使いたちの恐怖の的」であった。また、教え子ブルボン公は、人間というより「人間を食い荒らし、人間と戦うために生れてきたとしか思えない恐るべき野獣の一人」であった。※

※ Saint-Simon 《Mémoires》

サン・シモンはまた次のようなエピソードも伝えている。当時、コンデ家にはサントゥールという人の好い従者がいて、ブルボン公の妹に顔をひっぱたかれたり、コップを投げつけられたりしていたが、ある時ブルボン公は、たわむれにこの男のブドウ酒の中にスペイン煙草を混入し、死に至らしめたという。

彼は容貌魁偉、小男のくせに頭だけが異常に大きい癲癇病みの少年であったらしい。狩猟とお祭り騒ぎが大好きで、学問する気はほとんどなかった。これでは教える方も大変である。ラ・ブリュイエールは、こうした暴君につけ

こまれないよう常に神経を張りつめ、ことさら謹厳と沈黙を旨とし、距離を保つよう努めた。「宮廷の身分の高い連中というのは、底意地の悪さを隠して、他人を笑いものにし、何でもないことで人を馬鹿にせずにはおれぬものだ。……知恵ある人は、こういう連中にはことさら謹厳な態度で立ち向い、そこに立てこもる。こうすれば、いかに邪悪な意図を持った嘲り屋どもも、手を出す機会を見失う。」(Ⅸ26)

教育係とはいえ、その実、召使(ドメスティック)いと変るところはなかった。気位いの高い文人にとって、屈辱に満ちた地位でしかなかった。ラ・ブリュイエールは怒りをこめて言う。「人間は、やさしく、親切で、人の気に入ろうとする気質を持って生れてくる。それが、一緒に暮す人や、仕える主人から手ひどい仕打ちを受け、いつの間にやら自分の生活態度、天性からさえはずれてしまうに至るのだ。昔はついぞ覚えたためしのない怨みや怒りをいだく。別の人格になり下る。あげくの果ては、かたくなな、気むづかしい人間になったのに自らが驚くのだ。」(Ⅸ5)

だが、このようなコンデ家にも屈辱をつぐなって余りある魅力があった。その一つはシャンティ文庫である。コンデ公は年老いてからシャンティの地に隠栖し、文人たちと交わったことはすでに迷べたが、邸宅の中に豪華な書斎をしつらえ、古今の典籍を収集していた。ラ・ブリュイエールはコンデ公の生前、すでにこの文庫の管理を任されていたようである。

さらに、ブルボン公は一六八五年七月、ルイ十四世の娘、マドモワゼル・ド・ナントと結婚し、ここにラ・ブリュイエールは図らずもルイ十四世の王女の教育係も兼務することとなる。無名の文人には破格の名誉であった。

王族としての家柄に大コンデ公の勲功と名声が加わって、コンデ家は今や名実ともに王家に次ぐ名家であった。ここには当代一流の文人貴族がやって来たし、コンデ公やブルボン公のお供をしてヴェルサイユ宮殿へ赴くことも多かった。居ながらにして文人や大貴族に接し、宮廷人の生態を垣間見ることができた。『レ・カラクテール』の筆を進

めていたラ・ブリュイエールにとって、ここは絶好の視点、願ってもない人間観察の場であった。

一六八六年十二月、大コンデ公の死とともに教育係の仕事は終ったが、そのあともブルボン公の侍従（シャンブラン）としてコンデ家に留まった。主な仕事はシャンティ文庫の管理であった。こうしてラ・ブリュイエールは、大コンデ公の残した万巻の書にとり囲まれ、豪華な書斎の中で『レ・カラクテール』の執筆に没頭できることになった。

翌八七年五月、テオフラストスの翻訳と自作の『レ・カラクテール』の草稿はほぼ仕上った。五月十九日付、ボワローからラシーヌあての手紙に、はじめて『レ・カラクテール』についての記述が見える。「ラ・ブリュイエールが私を訪ね、テオフラストスの一部を読んでいった」とある。この頃、ラ・ブリュイエールは翻訳と自作の出来栄えについて先輩文人たちの意見を求めて廻っていたのである。

同年十月、ミシャレという書店が『レ・カラクテール』の出版を引受けた。一六六九年に店開きしたこの書店は、数学、化学から歴史、文学、神学に至るまで、当時最も幅広く新刊書を取揃え、学者、文人たちのしばしば訪れる所であった。ラ・ブリュイエールもほとんど毎日のようにここへ来て、本をあさり、主人や客と語るのを楽しみにしていたが、主人の小さい女の子を殊のほか可愛がっていた。ある日、彼は『レ・カラクテール』の原稿を主人に見せ、「これを出版してみないか？　儲かるかどうかはわからないが、もし成功したら、利益はこの子の結婚のときの持参金にしてほしい」と申し出た。はじめ、主人は大いにためらったが、十月八日に十年間の出版権を持つことで契約が成立し、出版にふみ切った。娘は、後年二、三十万フランの持参金を得て、さる財務官と結婚したという。※

※ Formey《Mémoires de l'Académie des sciences et belles-lettres de Berlin》

『レ・カラクテール』の初版は一六八八年三月に出版された。原題は、《Les Caractères de Théophraste, traduits du grec, avec les Caractères ou les Mœurs de ce siècle》『ギリシャ語より訳出せるテオフラストスの

人物論（レ・カラクテール）、付するに、人物論（レ・カラクテール）または当代の習俗』という。テオフラストスの翻訳が主で、ラ・ブリュイエールの自作は付録にすぎないという形態であった。翻訳のほうが大きな活字で巻頭に置かれ、自作は小活字で匿名のまま後半に添えられた。※

※　ページ数は、テオフラストス九七ページ。自作二二九ページ。

このことは、忠実な古典主義作家であったラ・ブリュイエールの古代ギリシャへの尊敬と遠慮を示すとともに、自作への謙遜と不安をも物語っている。

だが、出版は大成功であった。当時の新聞の伝えるところによると、初版はわずか二週間で売切れたという。※一年以内に三版まで印刷される売れ行きであった。読者はテオフラストスの翻訳よりも付録を歓迎した。そこには同時代人の生態が鮮かに描写され、現代への痛烈な批判と宮廷人や貴族への大胆な諷刺に満ちていたからである。

※　《Gazette de Hollande, le 15 juillet 1688》

アンリ・バナージュという亡命プロテスタントは早速一六八八年五月、オランダの新聞に『レ・カラクテール』を紹介し、作者は真の共和主義（レプブリカン）者の自由を感じさせる手法でアテネの習俗と現代の習俗を比較していること、人物の造型の仕方が大胆で極めて印象深いこと、良識と正しい判断に導かれた数々の箴言（マキシム）が存在することを称揚した。※

※　《Histoire des ouvrages des savants》

出版前、マルジューという友人が予言したように、それは「多くの読者と多くの敵を作る」こととなった。槍玉にあげられた貴族や聖職者は怒ったが、一般読者は生き生きとした表現、大胆な諷刺を喜んだ。なかでも、最も読者に受けたのがポルトレ（人物の肖像）であった。人々はそれが実在の誰であるか、当てるのを競い合った。モデルを解き明かす《鍵（かぎ）》なる解説書が出る有様であった。

好評に支えられて翌一六八九年二月、面目を一新した第四版が出版された。テオフラストスの翻訳はなお巻頭に置かれていたが、比重が軽くなった。初版にはわずか四二〇しかなかったラ・ブリュイエールの自作に新しく三五〇の断章が加えられた。ポルトレは三二から九三へ一挙に三倍近くにふえ、特に大物貴族や有名宮廷人に対する仮借ない人物論が多くなった。以後、毎年各版毎に新しい断章が増し、一六九四年の第八版では総数一一二〇、うちポルトレ一八三に達した。ほぼ三倍増である。

ラ・ブリュイエールはこの間、シャンティとヴェルサイユ宮殿内のコンデ家の邸宅にあって、『レ・カラクテール』の増補に専念した。文名も年々挙がり、一六九三年六月には、ボシュエやボワローなどに推され、アカデミーに迎えられた。入会演説において、ラ・ブュイエールは古代派の作家のみを称揚し、近代派は故意に黙殺した。これが、いわゆる《新旧論争》に対する彼の立場表明であった。ここにも彼の忠実な伝統主義者ぶりがうかがわれる。

ラ・ブリュイエールの晩年は静かであった。アカデミーの会合などにもほとんど出席せず、時たま宮廷に出て親しい友人と語るのを楽しみとしたが、たいていは喧騒をきらってシャンティの域館に住み、読書と執筆にあたった。一六九六年五月『レ・カラクテール』第九版の準備中、ヴェルサイユのコンデ家の館で、卒中のため亡くなった。五十歳であった。

作品

『レ・カラクテール』は全十六章、総数一一二〇の断章によって構成されている。

第一章　文芸作品について（六九）

第二章　人間の真価について（四四）

第三章　女について（八一）
第四章　心について（八五）
第五章　社交と会話について（八三）
第六章　まんまと手に入れた財産について（八三）
第七章　町の人について（二二）
第八章　宮廷について（一〇一）
第九章　貴族について（五六）
第十章　国王または国家について（三四）
第十一章　人間について（一五九）
第十二章　判断について（一一九）
第十三章　流行について（三一）
第十四章　いくつかの習慣について（七三）
第十五章　宗教界について（三〇）
第十六章　無神論者について（四九）
エピローグ（一）

各断章は、長短さまざまで、ひとつ一つが独立し完結している。思考の筋道も気まぐれで、会話のように次から次へ話題が移っていく。形式も、省察（レフレクシヨン）、箴言（マキシム）、警句（サンタンス）のたぐいに肖像（ポルトレ）がまじり合い、極めて変化に富んでいる。どこから読み始め、どこで終ってもいい。『レ・カラクテール』は、開放的で自由な十七世紀のサロンに似ている。

自由で独立した数多くの断章が、共通するテーマのもとに一つの章にまとめられ、各章の間には何の脈絡もなさそうだが、よく見ると、それらは大きな目標に向かって、一定の方向のもとに並べられている。古典主義時代のモラリストの書らしく、全てが人間の真実の発見とよりよい生き方の追求のために統制され、各章は次のような意図のもとに配置されている。

第一章、第二章は文学的、倫理的前書きである。筆者はまずここで、自分の文学的、倫理的立場を明確にする。第三章、第四章は人間の心理学的調査に当てられている。第五章から第十章までは人間の社会学的調査、環境の研究である。特に第六章から第十章までは階級別の研究がなされ、身分の低い層から高い方へと、漸次クライマックスに達する漸層法（グラダシオン）的配置がなされた。これは国王を頂点とする当時のピラミッド型社会体制の縮図である。第十一章から第十四章までは、真理への道をふさぐさまざまの障害についての研究に当てられ、ここであらゆる人間の虚妄と幻想が排除される。最後の第十五章、第十六章では宗教的議論がたたかわされ、人間にとって最も根元的な問題、神の認識へと導いて行く。

ひとつ一つの断章に与う限りの自由を認めながら、それらを大きな秩序のもとに統制する、これが『レ・カラクテール』の構成法であった。この時代には学者的な読書は全く嫌われていた。著者は、何よりも先ず読者を楽しませねばならなかった。退屈させたり、窮屈がらせたりしてはならなかった。しかも、それと同時に、著者は必ず読者を教え、導く一面を兼ねそなえていなければならなかった。“plaire et instruire”《喜ばれ、かつ教える》という、古典主義時代の作家に課されていた二律背反的難題を『レ・カラクテール』は見事に克服している。

芸術的苦心に加えて政治的配慮もなされねばならなかった。『レ・カラクテール』には鋭い社会批判と大胆な政治

論、それにきわどい宗教問答まで含まれていたから、当然、時の政治権力や宗教界からの反応が心配であった。

大蔵卿で文人たちのパトロンでもあったフーケが、ヴォーに壮麗な城館を建てたのが禍となって失脚し、終身禁固の刑に処せられた（一六六五年）記憶はまだ生々しかった。モリエールの『タルチュフ』（一六六四年）も、宗教を誹謗するものとしてカトリック団体から攻撃され、五年間上演禁止の憂き目をみていた。宮廷づきの作家で、ルイ十四世の庇護のもとにあったモリエールでさえこうであった。さらに、戦術家、築城家として名高かったヴォバンが特権階級の免税を非難し、国政を批判して『国王十分ノ一税』（一七〇七年）を発表し、その結果、禁書処分を受けて投獄され憤死した時も近かった。いかなる弾圧がくるやも知れなかった。

ラ・ブリュイエールは危険をよく知っていた。

「キリスト教徒として、フランス人として生れてきた者は、諷刺をするにも窮屈だ。大問題は彼には禁じられている。時々、ちょっと触れてみるだけだ。仕方なく、小さな問題にそれていき、これを自分の才能と文体の美で引上げるより仕様がない。」（I 65）

『レ・カラクテール』が、古代ギリシャの哲人テオフラストスの模倣、付録という形で出版されたのも、一つにはこのためである。巻頭のテオフラストスは、権力からの反撃をそらす煙幕であり、身を護る楯であった。

全巻の中心、第十章の締め括りには、ルイ十四世を讃美する長文のポルトレ（X 35）が配置された。すでにみたように、第六章から第十章までは身分の低い階層から高い階層へ向うグラダシオンの手法がとられたが、ラ・ブリュイエールはその頂点にルイ十四世の尊像を安置することを忘れなかった。その上、全巻の終りには敬虔な信仰告白を置いて、宗教界からの攻撃にそなえた。批評家のサント・ブーブは第十章と第十六章を権力からの落雷をふせぐ《避雷針》にたとえ、文学史家のランソンはこれらを身の安全を護る《パスポート》と述べている。※

※ Sainte-Beuve 《Nouveaux Lundis》
Gustave Lanson 《Histoire de la littérature française》

『レ・カラクテール』の本文は、次のようなつつましい謙遜の言葉で始る。

「全ては言い尽された。この世に人ありて、ものを考え始めてよりはや七千年、私は生れてくるのが遅すぎた。人間のさまざまについても、最も美しいこと、最もすぐれたことはすでに言挙げされた。私は古代の人や近代のすぐれた人々のあとから落穂を拾って歩くにすぎない。」（I 1）

このように文芸理念の上で、ラ・ブリュイエールは極めて忠実な伝統主義者、古典派であった。ただ、彼にはひそかな自負があった。つつましい謙遜で始った第一章は次のような強い確信で終る。

「ホラシウスかデプレオ（ボワロー）があなたより先にそういうことは言いましたよ。――なるほど、それはおっしゃる通りです。だが、私はそれを自分のものとして言ったのですよ。彼らのあとを受けて、ただ一つしかない本当のことを私が考えてはいけないとでも言うのですか。私のあとで、またほかの人も同じことを考えるでしょうに。」（I 69）

ラシーヌ、モリエール、パスカル、ラ・ロシュフコーなど、一六六〇年代の作家たちのすぐれた作品が出尽したあとで、さらに新しい真実を発見し、新しい美を創造することは至難の業であった。お手本があまりにもきらびやかであったし、読者の趣味も洗練されていた。ラ・ブリュイエールは損な時代にめぐり会わしたものである。

事実、彼の人間観や思想には、独自性と哲学的体系が欠けている。パスカルは、人間を神と獣の中間者として把え、ラ・ロシュフコーは人間のあらゆる行為の根元に自己愛を発見し、それを中核として、それぞれ独自の哲学体系

を樹立したが、ラ・ブリュイエールにはこのような新しい視点や中核となる思想はない。彼は、パスカル流に人間の弱さに涙し、ラ・ロシュフコー流に人間の自己愛を追認するにすぎない。

だが、忠実な古典派のラ・ブリュイエールにとって、模倣は恥でなく、むしろ義務であり、誇りでさえあったのである。「ただ一つしかない本当のこと」をたとえくり返しになろうとも、「自分のもの」として表現できればそれで充分であった。

ラ・ブリュイエールの「自分のもの」とは何であったか。彼は哲学者であるより画家であり、分析家であるよりは観察者であった。彼の「自分のもの」とは、すぐれた先人たちが発見した人間性の永遠の真実が今この時代にいかに現われているか、それを実証することであった。人間性が今の社会にいかに対応し、抑圧され、ゆがめられているか、それを具体的に表現することであった。

パスカルやラ・ロシュフコーは、多様な人間活動を観察し、そこから全ての人間に共通する普遍を抽出したが、逆に、ラ・ブリュイエールは、普遍的人間性が当代の社会にいかに対応しているかを観察した。パスカルやラ・ロシュフコーの人間像は帰納法による抽象的人間像であったのに対し、ラ・ブリュイエールのは演繹法による具体的人間像である。

ラ・ブリュイエールは『レ・カラクテール』の〝まえがき〟に「私は、世間の皆さんが私に貸して下さったものを、いまお返ししようと思う。この本の題材は皆さんから借り受けたものだ。」と書き始め、中程でも、「ここにもう一つ、読者の皆さんにぜひ守っていただきたい規則がある。それは、私のつけた標題をお忘れなく、ということである。この本をお読みになりながら、ここに描かれているのは当代の人物と習俗なのだ、ということをいつも考えていただきたい。」と現代への強い関心を述べている。

と同時に、それに続けて、「私はしばしば人物をフランスの宮廷や国民の中から選んだが、読者の皆さんはそれを一宮廷内に限ったり、一国の中に閉じ込めたりはしないでいただきたい。そんなことをすれば、せっかくの私の本が、視野の狭い、意義のないものになってしまう。人間一般を描こうとした私の意図から外れてしまうのである。また、それでは、各章の配列の仕方や各章を構成する数々の省察のさりげない並べ方にも一定の秩序が存在する訳などとうてい理解してはいただけない。」と言い、著者の意図は個人を描くことではなく、人物の典型を通じて人間一般、普遍的人間を描くことであると強調している。

ラ・ブリュイエールにおいては、普遍を指向しながら個別を描き、永遠を指向しながら現代を描くということは決して矛盾ではなかった。なぜなら、彼は人間性は万人に共通するし、永遠に不変であることを固く信じていたから。従って、現代の典型的人物を描きつつ人間一般を考え、普遍的人間性を考えつつその現代的具現を描く、というのが彼の基本的な文芸理念であったのである。こうして、『パンセ』や『マキシム』の人間は、時代と社会から切離された抽象的人間であったが、『レ・カラクテール』において初めて、当代の階級や身分を背負った時代的人間、社会的人間が描かれることになった。

第二章「人間の真価について」において、ラ・ブリュイエールは人間の生き方、社会の在り方を主題にしている。人間いかに生くべきか、社会は人間をいかに生かすべきか、社会と人間のかかわり方を論じた、道徳論的社会批判の章である。ラ・ブリュイエールは、彼の生きた十七世紀末の社会を何よりも先ず《ゆがみ社会》として把えた。それは「人間の真価」を認めず、門閥と財力が支配する体制であり、家柄や財産や称号など人間の付属物が横行して、個人の能力や才能を圧殺する時代であった。

「とりまきも仲間も持たず、いかなる派閥にも依らずただ独りで立ち、推薦状に代るものとてはおのが豊かな才

能のみ、という人間が、自分のいま取囲まれている暗闇をぬけ出し、日の目を見、親の七光りに包まれた馬鹿者と肩を並べるに至るまでには、何と恐ろしい苦しみが待ち受けていることか！」（Ⅱ4）

「他人のお蔭でなく自分ひとりの力によって偉くなれ、さもなくば、偉そうにするのは諦めろ、とは貴重な格言である。生活に無限の励みを与え、弱き者、有徳の士、才能ある人に有益である。彼らは、これによって自分の運命、自分の平安の主人になることができる。だが、身分の高い者にとっては、極めて危険な格言である。彼らの家来や奴隷の数をへらすであろうし、彼らの権威の一部を失墜させ、高い鼻をへし折るであろう。彼らをおつきの者や供廻りの者と同じようにしてしまうであろう。……」（Ⅱ11）

第二章の全てが、門閥や財力支配に対する怨嗟、攻撃であり、人間の能力を正しく受入れない社会体制の矛盾の告発である。

ゆがんだ社会の一方の極に、人口の大部分を占める農民がいた。片方の極には、往年の支配能力を失い、今は君寵のおこぼれにあずかるしか能のない封建貴族、宮廷人など、特権にしがみつく旧貴族がいた。この両極の間を、徴税請負人、金融業者、大商人など新興ブルジョワジーが忙しく立ち回り、農民から搾取したものを王権に貢ぎつつ、自分たちも上へ這い上ろうと狂奔していた。こうした絶対主義体制下のハイラルキーの上から下まで、ラ・ブリュイエールは見通していた。

宮廷文学、サロン文学として発達した十七世紀文学の中で、農民の姿が同情的に見つめられたのは『レ・カラクテール』が初めである。田舎から田園の自然描写を水々しい筆致で書き送ったセビニエ夫人の書簡においても、農民の生活はただおぞましく醜悪なものと感じられたにすぎないが、ラ・ブリュイエーはこう書いた。

「なにやら野性の動物らしいものが見える。雄も雌も、野良に散らばり、黒いもの鉛色のもの、みな陽に焼けている。いつまでも大地にへばりつき、土を掘り、はいづり回っている。人間の声みたいな鳴声だ。足で立ったところをよく見ると、人間の顔だ。まさしくこれは人間だ。夜になると巣に帰り、黒パンと水と根菜で命をつなぐ。ほかの人が、生きるために苦労して種をまき、耕し、収穫しなくてすむように彼らは働く。こうして彼らは、やっと自分たちのまいたパンにありついている。」(XI 128)

これは決して文学的誇張ではなかった。一六八七年、地方監察官からルイ十四世あての文書にも、羊歯(シダ)の根を食い、藁の上に寝、着るものも家具も食料の貯えもない農民の姿が報告されている。※

※ Lange 《La Bruyère, crtique des conditions et des institutions sociales》

ルイ十四世時代のフランスの総人口は千九百万くらいと推定されている。うち九〇パーセント以上が農民であった。都市近郊には、一部、富裕な自作農もいたが、大部分の農民は悲惨な生活を送っていた。栽培したのは麦とブドウだけで、単作地帯が多かったからしばしば飢饉におそわれた。しかも、コルベールの重商主義経済体制のもと、農作物に対しては一貫して低価格政策がとられていた。低賃金によって工業製品の生産費をできるだけ抑え、外国との輸出競争に勝たねばならなかった。農業の犠牲によるダンピング的貿易政策である。大商人や金融業者は恩恵をうけたが、零細農民にとって低穀価は残酷であった。

その上、農民は三重に税金を払っていた。国王の課税、聖職者への十分ノ一税、領主の賦課金(地代、使用税など)である。かつてルイ十三世は「鶏と農民は、わめかせないでむしり取れ」と命令し、リシュリューは「農民は牡の騾馬と同じだ。重い荷物を背負いなれているから、長く休むと躰をこわす。」と言ったが、同じ農民観が続いていた。むしろ、当時より国家財政が逼迫し、統治機構が整備されていたから、徴税方法はさらに苛酷であった。

ルイ十四世の治世は、初めから国家財政は赤字であったが、ヴェルサイユ宮殿の造営や度重なる対外戦争――ルイ十四世の治世五五年間のうち三分の二は戦争であった――の結果、一六八〇年代になると国の収支はますます不均衡になっていた。国庫収入をふやすには増税と、より苛酷な徴税によるより外はなかった。

十七世紀の税金は、直接税（タイユ）と間接税とに分れ、前者は各戸割りであったが、貴族と聖職者は免税特権を持っていた。間接税には塩税（gabelle）、消費税（aides）、交易税（traites）などがあって、たいていは徴税請負制度にゆだねられていた。これは、王税の徴収権という公権力が、契約を通じて、民間の金融業者に一定期間委譲される制度である。徴税請負人は国家に一定の金額を前払いし、その代り、それに見合う金額を納税者から税金として取立てる権利を得たのである。請負人とすれば、こうした徴税業務は前払いであるが故に、多少の危険もともなったが、見積り金額と必要経費の合計を上回る金額を民衆から取立てれば、その差額分は自分の収入となし得るうまみがあった。従って、少しでも金融能力のある者は、競ってこの利権の分け前にあずかろうとして、商業の発達とともに間接税の比重の増大する十七世紀後半には、多数の徴税請負人が発生した。

国王は、金融業者から一定の税額を先取りする。徴税権を委託された金融業者は、王の軍隊と裁判所の援護を受けて徴税に当る。その際、請負人は支払った額より多くを取立ることができれば、その差額は自分の利益となる。こういう制度であったから、王権をかさに着た徴税請負人の取立ては苛酷を極めた。未納者は、牛馬、衣服、寝台に至るまで差押えられ、支払うまで兵士が宿泊した。支払えないときは、空井戸の中に入れられたり、狭い土牢に身動きできぬほどの多数が押し込められたりもした。

ラ・ブリュイエールは、取立てられる側、取立てる側の双方を次のように描写し、人間性の名において搾取の冷酷さを告発した。

「土地収用、家具差押え、投獄、体刑、こうしたことも必要ではあろう。それは認める。だが、裁判や法律や止むを得ざる場合はさておき、人間が他の人間をいかに残酷に扱っているか、この事実を見れば私の驚きは日々に新たである。」(XI 127)

「シャンパーニュはちょうど今、長い晩餐を終えて腹はいっぱい、アヴネだかシルリだかのブドウ酒のかぐわしい匂いをただよわせながら、部下のさし出す徴税令書に署名する。それは、手直ししなければ、一つの州全体のパンを奪いかねない令書だ。無理もなかろう。腹いっぱいつめ込んだ今、どこかで誰かが、飢えに死んでいくなどと、どうして理解できよう?」(VI 18)

徴税請負人たちこそ、十七世紀末の社会のゆがみを最も端的に体現する人物であった。彼らはたいてい下賤の出である。もとをただせば農民や下男という者が多かった。(先ほどのシャンパーニュのポルトレもその一つである。当時、下男はしばしばその生国の名で呼ばれていた。)何らかのきっかけで小金を貯め、いささかの金融能力を持つようになると、目先の利く者は競って徴税請負制度の利権の末端につながろうとした。この制度も、一六八〇年代ともなるとなかなか複雑で、王権はまず徴税総請負人(fermier général)と直接取引する。徴税総請負人はその下の徴税下請負人(sous-fermier)というのに請負わせる。下請負人のさらにその下に平徴税吏(receveur)がいて、これが直接民衆から取り立てに当たった。徴税請負にもこういう階級制度ができ上っていたのである。

大ブルジョワの下男として働きながら小金を貯めたり、都市近郊の農民で農作物の売買によって利益を得たりした者が出世を望んだ時、まずねらうのが平徴税吏の地位であった。これは、ルイ十四世時代の階級社会における出世の最短コースであった。いったんこの地位につけば、あとは王権の威光をふりかざしながら庶民の血と汗の結晶を奪い、これを王権に貢ぎつつ自分の私腹もこやしながら徴税官の出世階段を一歩一歩登りつめる。あげくの果ては、売

官制度を利用して、この汚れた金で高い官職を買い、貴族になることも容易であった。だいたい五万リーヴル出せば、貴族の称号のついた官職を買うことができた。おまけに、教会に多額の寄附をすれば《美徳》まで買える時代であった。

「下男の制服を着ていたソジーが、徴税下請負の下請をやった。恐喝や乱暴や、お上のご威光をかさに着てのやりたい放題、あまたの家族を破滅におとし入れ、自分はとうとうある階級に上った。官職を買って貴族になれば、あとはもう善人になればよかった。教区財産管理委員の地位がこの奇蹟を成就させた。」(Ⅵ15)

『レ・カラクテール』には、こうした新興成金や成上り貴族が数多く登場する。彼らは最も巧妙に、悪辣に、絶対主義体制下の社会制度のゆがみを利用するのに成功した連中である。ルイ十四世時代は、たしかに厳格な階級社会ではあったが、決してその枠組みは一般に考えられているように固定したものではなかった。それは極めて流動的な階級社会であり、ある意味では下剋上の社会でもあった。

絶対主義時代とは、王権の庇護の下に金融業者、大商人、手工業の経営者など、新興ブルジョワジーが、政治経済の実権をにぎった時代である。中世に栄えた封建貴族の末裔は、政治経済の中央集権化の進む過程において、王権とブルジョワジーの双方からはさみ撃ちにあい、没落の道をたどっていた。彼らは、今や帯剣貴族の誇りを捨て、宮廷に入って王権に寄生し、恩寵のおこぼれにあずかって年金をいただくか、時流におくれて地方に残り、新興ブルジョワジーに先祖の土地を切売りしつつ空しい家門の誉れを守り、地方地主に転落していくか、そのいずれかしか道はなかった。

ここに良い例がある。『省察と箴言』の著者ラ・ロシュフコーの祖先はフランス南西部、アングーモワ州に広大な

領地を持ち、十一世紀以来連綿と続く家柄を誇っていた。その曽祖父は名君フランソワ一世（一四九四――一五四七）の名づけ親ともなったほどである。彼自身もフランソワ六世＝ラ・ロシュフコー公爵といういかめしい称号を持ち、青年時代には反王権、反中央集権化闘争のフロンドの乱に積極的に参加した。戦い敗れて重傷を負い、許された後にサロンの人となり、あのペシミスティクな『省察（マク）と箴言（シム）』（一六六五）を残したのである。だが、その子、フランソワ七世＝ラ・ロシュフコー公爵ともなると、父にはまだ残っていた封建領主の意地や武人貴族の誇りなど、もう微塵もなかった。彼は、宮中でルイ十四世の衣裳係の長官として忠勤に励み、四十年間王の起床のとき必ずそばにはべり、欠席したのはただの六回にすぎなかったという。※ まさに典型的な宮廷貴族となっていた。

※ Méthivier《Le siècle de Louis XIV》

また、旧貴族としての誇りを生涯持ち続け、時代の流れを冷やかに眺めつつ尨大な『回想録（メモアール）』を書き残したサン・シモン公爵は、ルイ十四世時代を「いやしいブルジョワどもの治世」と罵倒したが、そういう自分もヴェルサイユ宮殿内の屋根裏の一室をあてがわれて喜び、持参金目当てに収税吏の孫娘と結婚せざるを得なかったのである。旧貴族にとっては屈辱の時代であった。

『レ・カラクテール』には、こういう没落しゆく旧貴族と、勃興してきた新貴族の交錯が鮮かにとらえられている。

「徴税官が失敗すると、宮廷人たちは言う。あれはただの町人（ブルジョワ）だ。氏（うじ）、素性のない奴だ。どこの馬の骨とも知れない奴だ。もし成功すると、娘さんをいただかせてと結婚を申し込む。」（Ⅵ7）

当時、没落貴族と新興ブルジョワの縁組が極めて盛んであった。前者はこれによって財産を得、後者は家柄を補った。

一方、時流に乗れず、田舎に取り残された貴族はどうであったか。

「地方の貴族は、国家のためにも、家族のためにも、また本人にとっても無用の存在である。とかく、住むに家なく、着るに衣なく、いかなる才もないのに、日に十ぺんも俺は貴族だとくり返し、学者や司法官を町人あつかいにし、一生わが家の系図や爵位にこだわって、それを国璽尚書の前の銀頭の杖と交換しようとはしない。」（Ⅺ130）

銀頭の杖云々とは、国から官位を授かる儀式において、国璽尚書の前で銀頭の杖を持つことをいう。地方にいる封建貴族の末裔が、未だに過去の栄光にこだわって気位が高く、宮廷に出仕して官職につこうとはしないことを諷刺している。

では、宮廷貴族に転進した者の生態はどうであったか。当時のヴェルサイユ宮殿は《不死でない神》（＝国王）を祀る神殿であり、この半神を拝む礼拝所であった。宮廷人たちは、ただひたすら太陽王の前にひれ伏し、君寵のおこぼれにあずかろうと狂奔するだけであった。中世から十六世紀前半にかけて、あれほど王権にたてつき、歴代の国王に反抗した誇り高き封建貴族の子孫は、今や精神的にも経済的にも、全く王権に隷属してしまった。ラ・ブリュイエールは皮肉って言う。

「誰がいったい、忠勤を励む宮廷人より以上に奴隷的であるであろう？」（Ⅶ69）

「貴族は、領地で暮せば自由に生きられる。だが、糊口の資を得られない。宮廷で暮せば保護してもらえる。だが、奴隷である。うまくはいかぬ。」（Ⅶ67）

第八章「宮廷について」は、こうした金ぴかの奴隷制、宮廷人たちの自尊心のかけらもない阿諛追従ぶりを描いて余すところがない。

まさに、『レ・カラクテール』は、十七世紀末、絶対主義体制社会の最もすぐれたパノラマである。それは、ルイ

十四世の《大御世（グラン・シェークル）》の光と影、表と裏を描き尽した。そこには、著者の鋭い歴史感覚によって階級の浮沈、時代の流れまでが的確にとらえられた。しかも、著者は人間性の名において、社会体制が人間性を圧殺している事実に抗議し、常に社会のゆがみを告発する立場を貫いたが故に、それは当時の最も鋭い社会批判の書となり得たのである。

かくて、『レ・カラクテール』は、史上最も早く絶対主義体制の内部矛盾を内側から摘発し、十七世紀にありながら、早くも十八世紀啓蒙主義思想の先駆をなす栄誉を担うこととなった。しかも、ラ・ブリュイエール自身が序文で述べたように、それは人間性の不変を信じ永遠の人間を指向しつつ書かれたが故に、その人間像は一国家、一時代の中にとどまらず、われわれの社会、今の時代にも生き続けている。

テキスト

M. G. Servois《Les Grands Ecrivains de la France》(Hachette)

G. Cayrou《La Littérature Française illustrée》(Didier)

参考文献

P. Richard《La Bruyère et ses Caracctères》(Nizet)

M. Lange《La Bruyère, critique des conditions et des institutions sociales》(Slatkine)

H. Méthivier《Le siècle de Louis XIV》(P. U. F)

V. L. Saulnier《La littérature française du siècle classique》(P. U. F)